

A Satisfaction Factors Study of Studying Abroad in Japan : Questionnaire Survey to Chinese and Korean Professors

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): study abroad, China, Korea, satisfaction factors, graduate school 作成者: ONODERA, Kaori, OGAWA, Yoshikazu メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4030

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



日本留学の満足度要因に関する一考察 —中国と韓国の大学教授への質問紙調査から—

学芸学部 ライフプランニング学科 小野寺 香
広島大学大学院 教育学研究科 小川 佳万

要旨：本稿は、中国と韓国の大学教授を対象に実施した質問紙調査の結果を分析することで、日本留学（大学院段階）の満足度要因を明らかにすることを目的とする。考察の結果以下の四点を明らかにした。一つ目は、留学の満足度に関する質問項目の平均値は文系よりも理系の方が全体的に高い傾向にある。これは留学時の研究室内の人間関係の緊密さが文系よりも理系の方が強かったことや、留学を終えて母国に戻った際に理系の方が就職しやすい環境にあること等が関連していると考えられる。二つ目は、留学の満足度要因としては、研究室に関する要因が強い影響を持っていることが明らかとなった。三つ目は、中国の場合は留学した大学のランクも満足度に影響を与えるケースがみられた。ただし、必ずしもランクの高い大学へ留学することが満足度を高める要因となっているわけではない点は留意すべきである。四つ目は、韓国においては、「授業」に関する要因が満足度に影響を与えていることが確認された。一般にコースワーク重視と言われる韓国の大学においては、その授業力も問われることから、こうした結果に結びつくと推察される。

キーワード：留学、中国、韓国、満足度、大学院

はじめに

本稿は、日本への留学経験を有する中国と韓国の大学教授を対象とした質問紙調査の分析を通して、日本留学の満足度の背景にある要因について検討を加えることを目的とする。

現在、日本の大学院はグローバル化の影響下にあり、国際的な通用性、信頼性が強く求められていることは周知のとおりである（中央教育審議会、2005年）。また、例えば「留学生30万人計画」を打ち出したことによって、大学院が担うそうした役割は今後ますます重要になると予想される（IDE大学協会、2007年）。日本の大学院の国際的な通用性や信頼性を考える場合、その手掛かりの一つとして海外からの評価が挙げられる。外国の研究者やOECD等の国際機関による日本の大学院教育に関する著書や論文は最近少なからず出版されている（OECD、2009年）。例えば、日本は国際的な競争を意識する割にはまだ競争的資金の配分が低いこと、諸外国に比べ研究者の多様化（外国人教員の採用）や流動化が進んでいないこと、社会科学と人文学の博士課程の教育が他の主要国に比べ発展の幅が狭いこと等が指摘されており、こうした異なった視点からの意見や提言は傾聴に値しよう。

ただし、それらに勝るとも劣らないのは実際に日本の大学院教育を受けた経験を有する教授陣の声である。一定期間日本に滞在し、実際に学生として大学院教育を受けた経験をもつ彼らが、日本のそれをどのように認識しているのかを明らかにすることは今後の改革の方向性を定めるうえで極めて重要であると考えられる。本稿は、こうした課題に対して、主に質問紙調査を通して迫ろうとしたものである。

質問紙調査は広く日本留学時代と現在の教育研究活動、及び留学の満足度と成果に関するものである。本稿では、特に日本への留学の満足度に影響を与える要因について明らかにすることを目的とする。以下では、まず質問紙調査方法を説明したうえで、国別に日本留学の満足度に関する質問項目の平均値の検討を中心として分析を進める。また、留学の満足度に関係する要因について重回帰分析を行い、その結果から各国のデータにみられる特徴について考察を加えることにする。

1. 調査方法と回答者の属性

(1) 調査項目と実施時期

本研究において分析を行うのは、中国と韓国の日本留学経験を有する教授に対して実施した質問紙調査結

果である。その質問紙は、回答者の属性（9問）、日本留学時代と現在の教育研究活動、日本留学の満足度に関する質問項目を含んでいる。表1は、日本留学時代に関する、具体的な質問項目を示したものである。質問紙を送付する際には、表1に示した日本語の質問紙を中国語と韓国語に訳したものを使用した。

表1 日本留学時代に関する質問項目

授業	大学院の授業は自分の研究に役立った。
	大学院の授業は系統立っていた。
	大学院の成績評価は適切であった。
	先生方は熱心に授業を行っていた。
研究室	研究室のメンバーとの人間関係は良好であった。
	指導教員や先輩との間の上下関係は教育研究活動に効果的だった。
	研究室の施設設備は整っていた。
	研究室の行事（コンパ等）は楽しかった。
研究活動	教授は厳格な態度で研究に臨んでいた。
	博士論文（修士論文）は順調に完成した。
	自分の研究に対して仲間はよく助けてくれた。
	細やかな研究指導体制が整っていた。
	研究テーマは指導教員のテーマと関係があった。
ゼミ	ゼミに参加して研究の視野が広がった。
	ゼミによって最先端の研究動向が把握できた。
	ゼミは厳格な雰囲気で行われていた。
	ゼミで他人の発表を聞くことによって士気が上がった。
	ゼミは自分の研究に役立った。
満足度	日本に留学して良かった。
	留学を通して日本に対する印象が良くなった。
	留学によって就職が有利になった。

表1に示した、日本留学時代の教育研究活動及び留学の満足度についての質問項目には、「5. 非常にあてはまる」、「4. ややあてはまる」、「3. どちらとも言えない」、「2. あまりあてはまらない」、「1. 全くあてはまらない」の5件法を用いた。また、回答選択肢には5件法に加えて「0 わからない」も設けたが、分析の際にはそれと「無回答」は判断を下していないという意味で欠損値とした。

質問紙は、中国と韓国で2010年2月に予備調査を行い、その後4月から電子メールによる本調査を開始した。韓国は4月から5月にかけてと11月から1月にかけて実施した。中国は4月から9月にかけて実施した。

(2) 回答者の属性

本研究において中国と韓国の大学教授を調査の対象としたのは、日本で学ぶ留学生の出身国が、その2か

国で全体の約60%を占めていて（日本学生支援機構、2015年）、地理的にも、また日本との歴史的関係や影響という点からも特に重要であると考えたからである。換言すれば、日本の大学院の現状と課題を考察する場合、何よりも両国出身の留学生の意見は最も重要であり、彼らの声なくして改革はあり得ないと判断したからである。

また、本研究は、日本留学経験者のなかでも帰国後大学教授職に就いた者を対象とした。その理由は、現在彼らが母国の大学で教育研究活動に従事しており、日本との国際共同研究の経験等から日常的に日本の大学院の特徴を認識できる立場にあると考えたからである。

対象者の選定に関しては次の方法で行った。まず、中国については、「中国校友会網」（<http://cuuaa.net>）による2010年大学ランキング（「2010中国大学排行榜」）にもとづき、200位までの各大学のホームページにあたり、日本留学教授を探し出した。この方法の問題点としては、日本留学経験を有する教授であってもウェブ上にその情報が載せられていない（もしくは個人のホームページを立ち上げていない）場合があること、もう一つは、日本留学者を特定しても電子メールアドレスが記されていない場合、質問紙を送ることができないということが挙げられ、これらの点において、サンプリング方法に課題は残る。また、中国は大学数が多く、各大学のホームページから情報を得て行く作業は大変な時間を要するため、本研究では上位200校で区切った。上記の条件で、516人に質問紙を送り、表2のとおり153人から回答を得た。回収率は30%であった。

また、韓国については、全ての四年制大学のホームページにあたり、日本留学教授を探し出した。韓国に関しても、ウェブ上に日本留学経験のあることを公開し、かつ電子メールアドレスが記されている教授を対象としたという点で、サンプリング方法に課題を残していることを明記しておきたい。ただし、現時点ではこれ以外に日本留学教授を特定する方法は考えられない。上記の条件で、686人に電子メールを送り、表2のとおり158人から回答を得た。回収率は23%であった。

以上の方法で質問紙を送付及び回収した。次に、回答者の属性について言及していくことにする。以下の分類は、分析の際に用いられる区分でもある。

まずは、回答者の学問分野についてみることにする。もともと学問分野に関して、質問紙では、「1. 文系」、

「2. 理工農」、「3. 医師薬」、「4. その他」に区分していた。本研究では回答数が全体で311ということもあり、分析の際には「2. 理工農」と「3. 医師薬」の両者を「理系」とした。また数自体は多くはなかったが「4. その他」を選択した回答については、例えば、「芸術系」や「体育系」に所属する教員であれば、本研究ではそれらを「文系」に加えるなど、個別に判断した。本研究の回答者を学問分野別にみると、表2のように示される。中国、韓国ともに理系の割合が高いことが確認される。

表2 文理別回答者（カッコ内は%）

	中国	韓国
文系	29 (9.3)	56 (35.4)
理系	119 (77.8)	99 (62.7)
不明	5 (3.3)	3 (1.9)
合計	153	158

なお日本の大学院で学ぶ留学生は文理別で区分した場合、文系の方がやや多いという特徴がある（文部科学省、2011年）が、本研究の対象は大学教授に限定しているため、回答者の割合はその母集団と同じ傾向を示していると考えられる。両国の大学教授は理系の教員が過半数を占めているからである。なお、中国、韓国ともに文系の実数が少ない点は分析の際には注意が必要である。

また、回答者の性別については、中国は男性が71.9%（110名）、女性が16.3%（25名）、不明が11.8%（18名）であった。韓国は、男性が61.4%（97名）、女性が15.2%（24名）、不明が23.4%（37名）であった。両国ともに、男性の方が女性よりも圧倒的に多くなっている。日本の大学院で学ぶ留学生は全体としてやや男性の方が多というレベルにすぎない（文部科学省、2011年）が、研究対象は大学教授に限定されるので母集団の割合を反映していると考えられる。

(3) 回答者の留学年代と取得学位

日本の大学院を取り巻く状況は年代によって異なっている。周知のとおり、現在に連なる大学改革は1990年代初頭に始まったため、それ以前とそれ以後で、あるいは激動の大学改革が法人化を契機に多少落ち着いてきた2000年代とでは、日本の大学院教育に対する留学生の認識も異なることが予測できる。こうした点を検討するための分類として、留学年代を区分した。

中国は、1980年代以前に留学経験を有する者が8名（5.2%）、1990年代が49名（32%）、2000年代以降が

53名（34.6%）、不明・その他が43名（28.1%）であった。韓国については、同様に1980年代以前が36名（22.8%）、1990年代が64名（40.5%）、2000年代以降が39名（24.7%）、不明・その他が19名（12%）であった。日本への留学生総数は年代ごとに増加してきているが、それとともに帰国後大学教授として就職している者の数も増加傾向にあるかは不明である。そのなかで中国の「1980年代以前」は数が極端に少ないため、分析の際には注意が必要であろう。

また、取得学位については、中国は修士号が8名（5.2%）、博士号が102名（66.7%）、不明・その他が43名（28.1%）であった。一方、韓国は修士号が6名（3.8%）、博士号が133名（84.2%）、不明・その他が19名（12%）であった。両国ともに、多数は博士学位を取得している。両国とも博士学位は大学に就職するための「資格」となっているため、大学教授を対象とした本調査では当然の傾向となる。

なお、中国にやや「不明・その他」が多いのは、実際「不明」なのではなく、例えば中国国内で博士学位を取得し、その後ポスドク身分で2年程度日本に留学している者が多くみられた。このケースの多くは理系であり、中国ではそうした制度を活用して留学していることが本調査を通して明らかとなった。また、上述したとおり、本研究は、日本留学教授をウェブ上にて特定するという方法を採用したが、「日本に留学した」という趣旨のことがウェブ上に記されていても、学位を取得したかどうか不明であるケースもあった。こうした場合も質問紙を送っているため、「不明・その他」がやや多くなったのである。

(4) 日本での留学先と現在の所属大学

表3は、回答者の日本の留学先を世界大学ランクにもとづいて分類したものである。日本の大学の分類方法は先行研究においていくつかみられるが、本研究の場合、日本に加えて中国、韓国にも適用できるものが適当であると判断したため、上海交通大学が毎年実施している「世界大学ランキング」(Academic Ranking of World Universities)の2010年版に基づいて分類した。

大学ランキングは500位までが公開されているが、回答者は501位以下も含めてどのカテゴリーにも一定の割合がいることが表3からわかる。日本の大学全体からみれば、500位以内に入る大学はどれも研究大学であると言えるが、例えば50位以内の大学は2校のみ、51位から100位は3校のみであることに鑑みる

表3 留学先別回答者（カッコ内は％）

	中国	韓国
1位から50位	28 (18.3)	33 (20.9)
51位から100位	37 (24.2)	38 (24.1)
101位から300位	18 (11.8)	28 (17.7)
301位から500位	15 (9.8)	4 (2.5)
501位以下	31 (20.3)	23 (14.6)
不明	24 (15.7)	32 (20.3)
合計	153	158

と、留学の満足度要因には、こうした大学ランキングの上位に位置する大学に留学しているかどうかの影響している可能性がある。

次に、帰国後の就職先の大学を上海交通大学による世界大学ランキングにもとづいて分類した。ただ、中国、韓国の大学で500以内に入る大学は全体から見れば多くなく、かつ上位に位置する大学もほとんどないため、500位以内とそれ以外という分類を行った。中国は、500位以内が88名（57.5％）、それ以外が55名（35.9％）、不明が10名（6.5％）であった。韓国は、500位以内が36名（22.8％）、それ以外が98名（62.0％）、不明が24名（15.2％）であった。

こうしたランキングによる分類をみると、中国の大学教授の過半数が500位以内の大学に就職しており、この点は韓国とは対照的である。ただし、中国の場合500位以内に入っている大学の数もそれだけ多く、これが韓国と傾向が異なる主たる要因であると考えられる。

以上言及してきた属性をもとに、日本留学の満足度に関する論を進めていくことにする。

2. 中国における留学満足度

(1) 文理別留学満足度

まずは、中国のケースに焦点をあてる。日本への留学を経験した中国の大学教授は、留学の成果をどのように認識しているのだろうか。この点について検討を加えるため、まずは留学の満足度に関する質問項目の平均値をみていくことにする。表4は、全体と文理別にそれらを示したものである。

表4から、「留学を通して日本に対する印象が良くなった。」の平均値が4.46で最も高く、それに「日本に留学して良かった。」の4.32が続いていることが確認できる。では、こうした質問項目の平均値の間には有意差はみられるのだろうか。この点を検討するため

表4 留学満足度に関する質問項目の平均値（中国）

質問項目	全体の平均値	文系	理系	文系－理系
日本に留学して良かった。	4.32	4.17	4.35	-0.18
留学を通して日本に対する印象が良くなった。	4.46	4.31	4.51	-0.2
留学によって就職が有利になった。	4.19	3.9	4.27	-0.37 *

* 5％水準で有意。

に一元配置分析を行うと、そこには1％水準で有意な主効果がみられた（ $F(2, 290) = 8.654$, $MSe = .869$, $p < .01$ ）。また、多重比較（Bonferroniの方法）の結果、「留学を通して日本に対する印象が良くなった。」と他の二項目の平均値の間には5％水準で有意差が確認された。これは、周知のとおり近年中国との関係がしばしば敏感なものとなる日本にとって、多くの中国人留学生を日本が受け入れていることは、長期的にみた場合、日本の国益に沿うものになる可能性が高いことを示していると言えるであろう（佐藤、2010年）。ただし、そもそも本調査に回答した教授陣は、自身の留学を肯定的に捉えているから回答したのであり、そのため全体的な回答値が高くなっている可能性も大いにあることは留意すべきである。

次に、中国の大学教授による留学満足度に対する認識について、学問分野別にみるとそこには差がみられるのだろうか。表4中の「文系」と「理系」に着目すると全ての項目について、その平均値は文系よりも理系の方が高くなっていることがわかる。また、その差についてt検定を行うと、「留学によって就職が有利になった。」については文系と理系の間には5％水準で有意差がみられた。これは、中国の大学では理系の方が就職口が多いことが要因の一つとして考えられる。中国の大学教授を学問分野別にみると、圧倒的に理系、特に理工系の人数が多いことが確認され（中華人民共和国教育部、2008年）、先進諸国での留学経験をもつ理系の留学生は文系に比べ就職が困難ではないと推測される。

(2) 学位取得年代別留学満足度

では、日本の大学で学位を取得した年代別に、満足度に関する質問項目の平均値を比較すると、そこに差はみられるのだろうか。表5は、日本で学位を取得した年代を、「1980年代以前」、「1990年代」、「2000年代」の3つに区分し、それぞれの留学に関する質問項目の平均値を示したものである。

表5から、「日本に留学して良かった。」の平均値は

表5 年代別留学の成果に関する質問項目の平均値

質問項目	1980年代以前	1990年代	2000年代
日本に留学して良かった。	4.25	4.31	4.25
留学を通して日本に対する印象が良くなった。	4.13	4.38	4.43
留学によって就職が有利になった。	4.13	4.15	4.23

1980年代以前に学位を取得した人のそれが4.25であり、1990年代に学位を取得した人のそれは4.31と若干上昇しているが、2000年代に学位を取得した人の値は再び4.25へ低下していることが確認できる。

一方で、「留学を通して日本に対する印象が良くなった。」と「留学によって就職が有利になった。」の平均値をみると、学位を取得した年代について、1980年代から2000年代にかけてその値は高くなっている。ただし、こうした学位取得の年代別にみたとき各平均値の間に差がみられるかどうか検討するために一元配置分析を行うと、学位取得年代別にみた平均値の間に有意差はみられなかった。

(3) 全体の重回帰分析

中国の大学教授に焦点をあてると、留学の満足度にはどのような要因が影響を与えているのだろうか。ここでは、質問紙に含まれる質問項目を「授業」、「研究室」、「研究活動」、「ゼミ」に関連するものにそれぞれ区分し、その回答値を用いて作成した合成得点に加え、「性別」、「日本で取得した学位」、「留学していた日本の大学のランク」、さらに「現在所属する大学のランク」を独立変数として投入することによって重回帰分析を行った。

表6 全体の重回帰分析（中国）

独立変数	標準化係数
授業得点	0.229
研究室得点	.365*
研究活動得点	0.073
ゼミ得点	-0.018
性別ダミー（男性0、女性1）	-0.1
学位ダミー（修士0、博士1）	0.042
留学大学ランク	-0.224*
職場大学ランクダミー（501位以下0、500位以上1）	0.023
調整済R2乗	0.233

* 5%水準で有意。

表6から、「研究室得点」と「留学大学ランク」の標準化係数はそれぞれ0.365と-0.224でこれらは5%水準で有意となっていることがわかる。「研究室得点」については、研究室の人間関係が、満足度への影響を与えることを示唆している。

また、「留学大学ランク」に関しては、標準化係数が負の値を示しており、必ずしもランクが高い大学への留学が満足度と結びついているわけではないことが確認できる。上位にランクしている大学でなくとも、教員から丁寧な指導を受けたり、研究室内の学生同士の人間関係が良好であれば、それらが留学の満足度を高めているとも考えられる。

(4) 文理別重回帰分析

次に、学問分野別にみたとき、留学の満足度を従属変数とする重回帰分析の結果はどう異なるのだろうか。この結果を具体的に示したのが、表7である。

表7から、文系ではどの変数についても統計的な有意差は確認されていない。これは、回答者の属性で触れたとおり、中国文系の回答者数が少ないために有意差がみられない可能性も考えられる点は留意すべきである。

一方、理系についてみると、「研究室得点」の標準化係数が0.422でそれは5%水準で有意となっていることが確認できる。理系では、研究室に所属する教員と学生が共同でプロジェクトを行うケースがしばしば見られるため（福留、2003年）、やはり人間関係を中心とする研究室の環境は、留学の満足度にとって大きな影響力を有するのであろう。

表7 文理別重回帰分析

独立変数	標準化係数	
	文系	理系
授業得点	0.939	0.159
研究室得点	0.02	.422*
研究活動得点	-0.161	0.052
ゼミ得点	-0.925	0.054
性別ダミー（男性0、女性1）	-0.807	0.031
学位ダミー（修士0、博士1）	-0.136	0.135
留学大学ランク	-0.225	-0.148
職場大学ランクダミー（501位以下0、500位以上1）	0.471	0.024
調整済R2乗	0.317	0.246

* 5%水準で有意。

3. 韓国における留学満足度

(1) 全体の留学満足度

次に、日本への留学経験を有する韓国の大学教授に焦点をあて、彼らの日本留学の満足度について検討を加えていく。そこで、まずは留学の満足度に関する質問項目の平均値をみることにする。表8は、それを具体的に示したものである。

表8 留学満足度に関する質問項目の平均値（韓国）

質問項目	全体の平均値	文系	理系	文系－理系
日本に留学して良かった。	4.55	4.56	4.54	0.02
留学を通して日本に対する印象が良くなった。	4.46	4.31	4.55	-0.24 *
留学によって就職が有利になった。	4.4	4.32	4.44	-0.12

* 5%水準で有意。

表8から、留学の満足度に関する3つの質問項目の平均値は、すべて4.00を超えており、全体的に数値は高いが、なかでも「日本に留学して良かった。」のそれは4.55と最も高くなっている。ここで、こうした三項目の平均値の間に統計的有意差がみられるか確認するために一元配置分析を行うと、5%水準で有意な主効果がみられた ($F(2, 302)=3.795$, $MSe=1.083$, $p<.05$)。また、多重比較 (Bonferroniの方法)の結果、5%水準で「日本に留学して良かった。」と「留学によって就職が有利になった。」の平均値の間に有意差がみられた。韓国の大学の場合、英語を教授用語とした授業を積極的に展開するなどの傾向がみられることから、英語圏の大学へ留学し学位を取得することが就職という意味では有利に働く可能性がある。実際、韓国の大学教授はアメリカの大学で学位を取得した者が多くを占めている (東北大学研究会、2006年)。こうした状況に鑑みると、日本への留学は例えば言語という意味でも就職に直接有利に働いたということが多いとは考えにくい、留学によって得るものは多かったと解釈していることが推測される。

次に、留学の満足度に関する質問項目の平均値を文理別にみると、そこにどのような差がみられるのだろうか。

表8から、「日本に留学して良かった。」については文系の平均値は理系のそれより0.02高いが、他の二項目をみると理系の方が値は高く、とりわけ「留学を通して日本に対する印象が良くなった。」について、その差は5%水準で有意差となっているのである。これは、先にも言及したとおり、理系の方が、比較的多くの人数で構成される研究室のなかでより多くの人間

と接することを通して、研究面だけではなく、広く日本文化や日本人理解を深めていったためと考えられる。

(2) 年代別留学満足度

ここでは、日本で学位を取得した年代別に留学満足度に関する項目の平均値を比較し、その差をみていくことにする。表9は、留学に関する質問項目の平均値を学位取得年代別に示したものである。

表9 年代別留学の成果に関する質問項目の平均値

質問項目	1980年代以前	1990年代	2000年代
日本に留学して良かった。	4.43	4.65	4.47
留学を通して日本に対する印象が良くなった。	4.49	4.44	4.37
留学によって就職が有利になった。	4.34	4.57	4.15

表9から、「留学を通して日本に対する印象が良くなった。」の平均値をみると、学位取得時期について「1980年代以前」の4.49、「1990年代」の4.44、「2000年代」の4.37と、次第に低下していることが確認できる。ただ、一元配置分析を行うとこれらの値の間には有意差はみられなかった。

一方、「日本に留学して良かった。」と「留学によって就職が有利になった。」の平均値をみると、その値は学位取得時期が「1980年代以前」から「1990年代」にかけては上昇しているが、「2000年代」になると再び低下する傾向にあることがわかる。ただし、一元配置分析を行うと、これらの項目についても学位取得年代間の平均値には有意差はみられなかった点は留意すべきである。

(3) 全体の重回帰分析

韓国の大学教授に焦点をあけると、留学の満足度にはどのような要因が影響を与えているのだろうか。ここでは、この点を明らかにするために、留学の満足度を従属変数として重回帰分析を行った。また、独立変数は、中国の分析と同様に、「授業得点」、「研究室得点」、「研究活動得点」、「ゼミ得点」、「性別ダミー」、「学位ダミー」、「留学大学ランク」、「職場大学ランクダミー」とした。表10は、その結果を示したものである。

表10から、「研究室得点」と「授業得点」の標準化係数はそれぞれ0.503と0.251であり1%水準で有意となっていることが確認できる。

表 10 全体の重回帰分析（韓国）

独立変数	標準化係数
授業得点	.251**
研究室得点	.503**
研究活動得点	0.136
ゼミ得点	-0.01
性別ダミー（男性0、女性1）	-0.048
学位ダミー（修士0、博士1）	-0.1
留学大学ランク	-0.05
職場大学ランクダミー （501位以下0、500位以上1）	-0.03
調整済R2乗	0.443

** 1%水準で有意。

上述の中国のケースに焦点をあてた際の重回帰分析においても、研究室の環境は留学の満足度に対して影響力を有していたことに鑑みると、やはり留学の満足度には研究室内の人間関係を中心とする環境が重要な意味を持つものと判断できる（濱中、2009年）。

(4) 文理別重回帰分析

では、次に韓国の大学教授を文系と理系に区分し、さらに同様の重回帰分析を行うと、留学の満足度に対して影響を有する要素は異なるのだろうか。表 11 は、重回帰分析の結果を文系と理系について示したものである。

表 11 から、文系ではどの独立変数についても留学の満足度に対して有意に影響を与えていないことが確認される。これは、中国同様、本調査によって得られた文系のデータ数が不足していたこととも関連がある

表 11 文理別重回帰分析（韓国）

独立変数	標準化係数	
	文系	理系
授業得点	0.46	.276*
研究室得点	0.308	.373**
研究活動得点	0.186	0.103
ゼミ得点	-0.267	0.053
性別ダミー（男性0、女性1）	0.006	-0.089
学位ダミー（修士0、博士1）	-0.259	0.15
留学大学ランク	-0.255	0.074
職場大学ランクダミー （501位以下0、500位以上1）	0.079	-0.024
調整済R2乗	0.525	0.407

** 1%水準で有意。

* 5%水準で有意。

と考えられる。また、本調査で使用した質問紙に含まれる内容以外に、文系の留学生からみたときに留学の満足度に影響力を有する要素が存在することも考えられるため、それを追求することを今後の課題の一つとしたい。

一方、理系に着目すると、「研究室得点」と「授業得点」の標準化係数が 0.373 と 0.276 で、それぞれ 1%水準と 5%水準で有意となっている。「研究室得点」について、留学の満足度に対して研究室の環境が影響力を有する点は中国を対象とした分析によって浮き彫りとなった傾向と同様である。

また、「授業得点」については、一般にコースワーク重視の韓国の大学においては、その授業力も問われることから、こうした結果に結びついたと推察される（馬越、2007年）。

おわりに

以上、日本への留学を経験した中国と韓国の大学教授への質問紙調査から得られたデータをもとに、日本留学の満足度に関して考察を加えてきた。本稿で明らかとなったのは、次の 4 点である。

1 つ目は、留学の満足度に関する質問項目の平均値は文系よりも理系の方が全体的に高い傾向にあることである。これは留学時の研究室内の人間関係の緊密さが文系よりも理系の方が強かったことや、留学を終えて母国に戻った際に理系の方が就職しやすい環境にあること等が関連していると考えられる。

2 つ目は、留学の満足度に対して影響力を有する要因について明らかにするため、重回帰分析を行うと、両国とも研究室に関する要因が大きな影響を持っていると言える。

3 つ目は、同様に重回帰分析の結果、中国の場合は留学した大学のランクも満足度に影響を与えるケースがみられたことも着目に値する。ただし、それは必ずしもランクの高い大学へ留学することが満足度を高める要因となっているわけではない点は留意すべきであると言えるだろう。

4 つ目は、一方の韓国においては、「授業」に関する項目について満足度との関係が確認された。一般にコースワーク重視の韓国の大学においては、その授業力も問われることから、こうした結果に結びついたと推察される。

本研究においては、中国及び韓国ともに文系のデータの不足という限界を抱えていた。そのため、今後はより幅広いデータの確保とともに、留学満足度に関係

する要因について質的研究も進めていくことを課題としたい。

参考文献

- IDE 大学協会『IDE 現代の高等教育：特集 留学生政策の新段階』2007 年 10 月号。
- 馬越徹『比較教育学－越境のレッスン－』東信堂、2007 年。
- OECD（編）『日本の大学改革－OECD 高等教育政策レビュー：日本－』明石書店、2009 年。
- 佐藤由利子『日本の留学生政策の評価－人材養成、友好促進、経済効果の視点から－』東信堂、2010 年。
- 上海交通大学「Academic Ranking of World Universities」
<<http://www.arwu.org/ARWU2010.jsp>>
- 中央教育審議会「新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－」、2005 年。
- 中華人民共和国教育部『中国教育事業統計年鑑』人民教育出版社、2008 年。
- 中国校友会網「2010 中国大学排行榜」
<<http://cuaa.net>>
- 日本学生支援機構、2015 年「平成 26 年度外国人留学生在籍状況調査結果」
<http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data14.html>
- 濱中淳子『大学院改革の社会学－工学系の教育機能を検証する－』東洋館出版社、2009 年。
- 福留東土「第 5 章 博士論文に関する研究」広島大学高等教育研究開発センター（編）『大学院教育と学位授与に関する研究－全国調査の報告－』広島大学高等教育研究開発センター、2004 年、67－72 頁。
- 東北大学研究会（編）『東北大学の研究Ⅲ－国際シンポジウム「アジアからみた東北大学の学問風土」の報告－』東北大学大学院教育学研究科、2006 年、59 頁。
- 文部科学省「学校基本統計」
<<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001011528>>、2011 年。

A Satisfaction Factors Study of Studying Abroad in Japan: Questionnaire Survey to Chinese and Korean Professors

Faculty of Liberal Arts, Department of Life Planning
Kaori ONODERA
Hiroshima University, Graduate School of Education
Yoshikazu OGAWA

Abstract

This paper aims to clarify satisfaction factors of the study in Japan (graduate school) by analyzing the results of the questionnaire survey to Chinese and Korean university professors. Following four points are the result of the analysis. The first finding is that natural science professors are more satisfied with the study abroad in Japan than professors of liberal arts. It is first because the human relations of natural science in a laboratory is closer than that of liberal arts, and second because the students of natural science are easier to find jobs when going back to the mother countries. As for the second, the factor related to the laboratory has strong influence on satisfaction degrees the study abroad. In the case of China, as for the third finding, the college rank affects the satisfaction degrees, but it does not always the case that the higher is the college rank, the stronger is the satisfaction. The fourthly, in Korea, the 'lecture' factor gives strong impacts on the satisfaction degree. It may be because Korean university in general emphasizes course work and daily teaching practice.

Keywords: study abroad, China, Korea, satisfaction factors, graduate school